キタを愛する人たちのための、キタを再発見するマガジン。ネットに載らない情報テンコ盛り。

つながるひとまちふんか

つひまぶ 本と人号

vol.21 2022 11月号

北区魅力発信フリーペーパー「つひまぶ」vol.21　2022年11月1日発行　編集・発行：北区のおもろ通信団（編集長／浅香保ルイス龍太　編集スタッフ／秋山暁子・上田幸美・高田豪・髙橋愛典・西野仁・松岡慧祐・吉野早苗）**協力：**大阪市北区・北区コミュニティセンター・奈良県立大学地域創造研究センター　**連絡先：**【mail】tsuhimabu@gmail.com　【web】https://tsuhimabu.com　**定価：**0円　**主な配布場所：**大阪市北区役所・北区民センター・大淀コミュニティセンター・北図書館・大阪市住まい情報センター・大阪市北区社会福祉協議会・江之子島文化芸術創造センター・大阪市ボランティア市民活動センターほか多数（配布場所はwebにて随時お知らせします）
※当雑誌の内容、テキスト、画像、イラスト等の無断転載・無断使用を禁止します。

喫茶 オリオン

マンガは多いがマンガ喫茶ではない

そのココロは？

天神橋筋商店街の由緒正しいマンガ喫茶（？）

お母さんの話がおもしろすぎて話は脱線しまくり

JR天満駅から南へ歩いて数分、いや数十秒。天神橋筋商店街にある『喫茶オリオン』に行ってきた。店舗は2階にあり、1段1段がやや高い階段を上がるとガラス張りでなかが丸見えの自動ドアが迎えてくれる。もちろん自動ドアには「まんが・本 喫茶 オリオン」と書かれておりガラス越しに店内の本棚が丸見えのままお出迎えしてくれる。「マンガぎょうさん置いてるな〜」と階段を上がってきた誰もが思うのではないか。

喫茶オリオンは前田信雄さん（75歳）と鈴子さん（84歳）のご夫婦で営んでおられる。今回は信雄さんに急用ができたとのことで鈴子さんにお話をうかがった。

鈴子さんは鹿児島の生まれで手に職を付けるため「虹のまち」（今のなんばウォーク）の洋品店に就職。洋裁の技術を働きながら学んだ。ある日同郷の友人と梅田で会い、梅田のパーラー（カフェ）での仕事を紹介され喫茶店の仕事に就いたという。鈴子さんのご家族ご親類はお固いお仕事の方が多く「赤い灯青い灯」とも呼ばれるパーラーへの転職は少し後ろめたくはあった。しかしそこで信雄さんと出会い結婚、喫茶オリオンをはじめることになる（お店の話を聞きに行ったのだが、鈴子さんの話がおもしろく、鹿児島から大阪に就職で出てきたときの話、当時の大阪の話、信雄さんとの出会いの話、と話が尽きなかったのだがここでは省くこととする）。

喫茶オリオンをはじめたのは1974年（昭和49年）。現在の『ガクブチの大和』の場所で約10年、その後1986年（昭和61年）に立ち退きとなり現在の2階の店舗に移転した。今年で48年目になる。

ニコニコと気さくな感じの鈴子さんに（まるで自分の母親に話し掛ける気分になりそうになるがその気持ちを抑えつつ）マンガを置くきっかけを聞いてみた。

「お店が2階にあるのでお客さんを呼ぶ何かが欲しいと思って、最初は週刊誌を置いていました。でもそれでは他の喫茶店と変わらないと思っていたところに常連さんがアドバイスをしてくれて、思い切ってマンガを置いてみることにしたのがはじまりです」ということだった。

「でもマンガ喫茶と思ったことはないんですよ」とも。

1986年（昭和61年）頃といえば少年誌で連載中の『ドラゴンボール』や『聖闘士星矢』、『めぞん一刻』のアニメが放映され、少女誌では『ちびまる子ちゃん』の連載がはじまり、『美味しんぼ』で使われた「究極」という言葉が流行語になっていた頃である。「当時バブルの真っただなかということもあり、マンガを置いたアイデアは大成功して、いつも満席に近い状態が続きましたよ。ただ、コーヒー1杯で長居される方も多く2時間くらいでなるべく帰ってもらえるように伝票に来店時間をメモしたりしていました」というご苦労もあったようだ。

店内のマンガをザッと見渡してみると男性向け、特にスポーツ・格闘技系のマンガが多い。男性マンガと少女マンガの比率は8：2といったところである。マンガの品揃えの基準について聞いてみた。

「娘の旦那さんに任せています。私はマンガのことは一切分からんので婿さん任せです。読んだ本を持ってきて置いていくんよ」とのこと。なるほど！　だから男性向けのマンガ本が多いのか。これじゃあお婿さんの読書遍歴が丸分かりではないか！

ちなみに鈴子さんの好きなマンガを聞いてみたら「私はマンガは読みません。『女性○身』とか週刊誌が好きですね。お父さん（信雄さん）はマンガ好きやけど」とのことだった。

時間があるときには信雄さんはお店にあるマンガを読んでいるらしいが、鈴子さんは信雄さんがどのマンガが好きかは知らないとのこと。

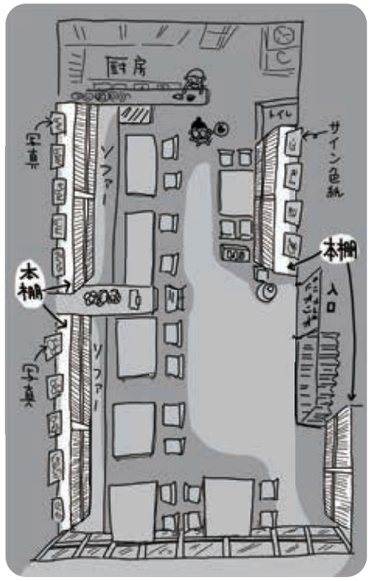
本棚の上には格闘家と一緒に写った写真やサイン色紙がたくさん飾られている。

近くに正道会館の道場があるので選手もランチを食べに来ることが多く、あの石井和義館長も昔からよくコーヒーを飲みに来ていたとか。正道会館の選手も喫茶オリオンの格闘技マンガを読んだりするのかしら…と思ってしまった。

お店で出されるメニューが充実なのでメニューについて聞いてみた（モーニングセットだけで7つある）。

「パンはすべて手切り。ランチのごはんもすべて手づくりです。なるべく冷凍食品は使いません。モーニングのサンドイッチに使用される卵は2個。普通のサンドイッチには卵を6個使っています」。固定のランチメニューはあるが新しいメニューも手書きで加えられていてなかなかの充実ぶりなのだ。お客さんは男性サラリーマンも多いがご近所の方も多く、信雄さんや鈴子さんの人柄に引かれ世間話をしに来たり、ご近所さん同士でコーヒーを飲みに来る人も多いようである。

マンガを読みたい人とそうでない人が上手いあんばいに同じ空間にいて居心地が良い。「マンガはたくさん置いてあるけどマンガ喫茶ではない」と鈴子さんが言っていたのはこういうことではないかと思う。そこがオリオンの魅力なのではないか。（むしまつ）



編集後記

前々号から編集スタッフとして参加した新人の私。編集スタッフとしてはペーペー、まだお茶くみレベル、先輩より先に行って事務所の掃除とかしなくちゃいけない新人の私が今号表紙のディレクション（いまだにディレクションがなにか理解してない）をして最終ページと編集後記を書くことになった。あなたが今手にしている素敵フリーペーパーの表紙ページを1枚だけ持って反対に広げてみよう。そこには私の関係した記事が左右に広がっているではないか！　なんとも恐ろしい。3号目にして広げて左右だ！　フリーペーパーの顔たるお表紙様と締めくくりたるお最終ページ様なのに！　新人なのにぃ！　と悶絶して編集後記を書いている。しかしご安心を。冊子内部には先輩方の充実した大変成熟した記事が盛りだくさん。つひまぶ独自の視点からひねり出された「本と人号」今号もおもしろい号となっている。そしてこの編集後記を編集会議中に先輩から出た某アニメの名言で締めくくるとする「紙の本を買いなよ」。（むしまつ）

つひまぶ web
https://tsuhimabu.com/
バックナンバー読めるよ！

「つひまぶ」では、編集メンバーを随時募集しています。興味がある方は、Facebookページ「つひまぶ」までご連絡ください。

まちの小さな図書館 まちライブラリー

自宅や仕事場の一部を開放して私設図書館 本からはじまる人のつながり

西天満小学校のすぐ南東、通学路に面した場所に、白い壁と大きな窓が印象的な建物がある。なかをのぞくと、壁一面にぎっしりと本が並び、中央には大きなテーブルがいくつかあり、ママさんや子どもたちが、ゆったりと本を読んだり勉強したりしている。

1717年（享保2年）から約230年間続いた線香商『福井北勝堂』の跡地を改装し、11代目の当主である福井英夫さんが2021年（令和3年）3月にオープンさせたのが、ここ、まちライブラリー『北勝堂』だ。蔵書は約6000冊。福祉やまちづくり関係の本から大阪の歴史本まで、人文書から時代小説まで、1番人気は絵本、そして児童書、マンガ…。無料で本が借りられる私設図書館で、絵本の読み聞かせやDVD上映会などもおこなわれている。

北勝堂
北区西天満 3-7-7
machi-library.org/where/detail/6106/
開館時間：火曜～土曜の 9:30～18:00（※12:00～14:00 一時閉館）
2週間で5冊まで借りられる

人のつながり、世代間のつながり、歴史を通じたまちのつながりをつくる西天満『北勝堂』

「古くから続くこのエリアにもマンションが建ち、新しく暮らす人が増えました。それに伴って、横のつながりが希薄になってきたように思います。例えば、子育てママのなかには、友達がおらず、コロナ禍で両親を頼ることもできず、孤独を感じているママさんがいます。この場所に来られたママさんのなかには、3日ぶりに日本語を話した！と、おっしゃる人もいた。西天満は人口が増えているんですが、一方で、あたりまえの人のつながりが切れていることを実感します。これはまずいんじゃないだろうかと思っています」。

元々公務員だった福井さんは、介護保険を担当していた時代に、子どもから認知症のお年寄りまでの多種多様な人々が1つのスペースで一緒に楽しく過ごす「富山型デイサービス」を知り、世代を超えた多年代でつながることの大切さを痛感する。そういう場をつくりたいと構想し、そんな思いがまず、図書館というかたちになった。福井さんが一貫して考えているのは、「出会いを仕掛ける」ことだ。

「絵本の読み聞かせをやったところ、ママさん同士が知り合い、LINEを交換し、中之島へ一緒に散歩に行くなどの付き合いに発展していきました。本はあくまで〝看板〟。ここは本のある空間でしかなく、ここでみんながなにができるかを考えています。新しいつながり方をしたい人にとって、オープンな場でありたいと思っています。今はまだ、場に対する信頼感をつくっている最中」。

当初から構想していたのは、多世代で暮らせる集合住宅のようなもの。人のつながりだけでなく、世代間のつながりやまちの歴史のつながりも切れていると感じる福井さんは、「こんな社会は貧しい、都会は貧しい」と話す。

「1人の人が死ぬということは、1つの図書館がなくなるに等しいんです。その人の蓄えた知識や経験を次世代にどう伝えていくか。そのためにも多世代がつながることは大切です。また、『北勝堂』ではメールマガジンを発行し、利用者さんにまちの歴史なども伝えています。例えば老松の地名の由来やかつて流れていた蜆川のことなどを知ってもらい、見慣れた風景からまちの歴史を感じてもらえたらと思っています」。

「年を取ると〝居場所〟〝役割〟〝仲間〟が失われがち。自分がここにいてもいいんだと思える場をつくっていきたい」。

その第一歩は、利用者に人気の絵本を探すことから。『北勝堂』運営の傍ら、今日も絵本探しに古書店をめぐる福井さんなのだった。

思いのこもった本を処分したくない これからも誰かに読んでほしいとの思いではじまった 中津『本の部屋 Ton ton』

今年の4月、中津中央公園のすぐ北側の路地の奥に、築65年の木造2階建てアパートをリノベーションしたアップサイクルの発信拠点『UPCYCLE中津荘』が誕生した。アップサイクルとは、廃棄物や不要になったものに手を加え、そのモノの価値を高める手法のこと。その中津荘の一室に、私設図書館『本の部屋Ton ton』がある。捨てられ処分されそうになった本をなんとかできないか？というところからスタートしたというTon tonは、まさにアップサイクルを体現していると言える。運営をされている安田京子さんと松尾裕美さんのお2人にお話を聞いた。僕もお2人も筋金入りの本好きなので、すぐに本の話に外れてしまうのをなんとか防ぎながらの（笑）取材となった。

「勤務している団体にはライブラリーがあったのですが、本が集まり過ぎて、またコロナ禍で気軽に本を貸し出したりできない状況もあって、そこに集まった本が処分されることになったんです。でも、そのなかには思いのこもった本がたくさんあり、処分なんてできないなと思っていました。そんなとき、『UPCYCLE中津荘』の存在や、そこで地域ネットワークの拠点づくりをされている『関係案内所なかつもり』の山田摩利子さんと出会い、処分されるはずだった本を生かせる道が開けたんです」。

出会いをきっかけに、とんとん拍子で話が進んでいったのだとか。

「最初は、3週間限定ショップの『あかりと本の部屋』や、『えほんピクニック』のサテライト開催をさせていただいたりしました。『えほんピクニック』では、公園で絵本を読んだり、持ち寄った本の取り換えっこをする『わらしべmethod』をやったり、同時に中津福祉会館では親子カフェに出させてもらったり。いろいろな活動をするなかで、この中津には本に興味のある人がたくさんいることが分かりました。絵本ピクニックではお父さんがお子さんたちに絵本の読み聞かせをしているケースがたくさんあって、それも慣れていらっしゃる様子で、意外な発見もありました」。

その流れに乗るかたちで、この4月に『本の部屋Ton ton』がオープンする。

「ここで子どもに読み聞かせをしたり、1人で朗読している人がいたり…。声に出して読むって大切ですよね。大人になってからは声に出して本を読むことがあまりないので、ぜひやってもらいたいです。ふらっと来て、気軽に入ってもらって、昔の近所の本屋さんのようになれば」。

本の部屋 Ton ton
北区中津 3-17-5 UPCICLE 中津荘101号
hon_noheya_tonton2022
開館時間：11:00 ～ 16:00
開館日：不定期（Instagram で告知）
貸出期間と冊数の制限は特になし

「思いのこもった本を処分するのがイヤではじまった場所です。本から人がつながっていけばいい。本を通して仲間が増えるとうれしいです」。

北勝堂でもTon tonでも、棚を眺めていると、気になる本がたくさんあった。でも、もしかしたら同じ本を大きな図書館や書店で見掛けても、素通りしていたかもしれない。あの場所だから、特別に見えたのかも。きっと、本を選んだ人の思いが本に宿っているのが伝わるのだろう。そんな思いに吸い寄せられ、人が集まり、場が生まれ、まちが動くのだろうと思う。

（ルイス）

まちライブラリーって何？

「まちライブラリー」とは、みんなで持ち寄った本でつくる、まちの私設図書館のようなもの。本には寄贈者からのメッセージが書かれ、読んだ人が感想を付け足したりして、人々が本を通じて出会ったり、つながったりする仕組みが、まちライブラリーです。

人々が本を持ち寄り、本をきっかけにちょっとしたお話をしたり、本を囲んでお茶会をしたり…、「植本祭」と呼ばれる交流イベントなども開催されています。

まちライブラリーは、森ビル（株）で産学連携・会員制図書館『六本木アカデミーヒルズ』を立ち上げた磯井純充さんによって提唱され、2011年（平成23年）、第1号となる『ISまちライブラリー』が天満橋のアイエスビルに誕生しました。ビルのテナントや近隣の人たちが一緒になって本棚やブックエンドをつくり、本を持ち寄って開設されたとか。2013年（平成25年）には、大阪府立大学（現・大阪公立大学）難波キャンパスに『まちライブラリー@大阪府立大学』が開設され、同年、本が人と人の交流の媒体となる「新しい図書館のあり方」を示しているとして、グッドデザイン賞を受賞。

まちライブラリーを開設したい方には、（一社）まちライブラリーが相談に乗ってくれたり、開設グッズを提供してくれたりと、サポート体制も充実しています。

また、他のライブラリーのオーナーとの交流会も。年齢や性別に関係なく、誰でもはじめられる気軽さから活動は少しずつ広がり、お寺・カフェ・個人宅・病院など、今年3月現在、全国で900カ所以上開設されています。

HPで大阪市北区のまちライブラリーを検索すると、12件がヒット。個人宅からカフェ・バー・コミュニティスペース・公園・保護猫カフェまで、バラエティー豊かです。気になる場所があれば、のぞいてみてください。いいことあるかもですよ。（秋山暁子）

梅田の『MARUZEN&ジュンク堂書店梅田店』3階に、絵本の世界をモチーフにしたグッズの企画・販売をおこなう新店舗「EHONS UMEDA」が今夏オープン。絵本好きにはたまらない空間が広がっている。

潜入！ザ・専門書店

ボディーチェックをくぐり抜けた先にある法律書のワンダーランド

大阪高裁内ブックセンター
北区西天満 2-1-10 大阪裁判所合同庁舎 本館 1F
tel. 06-6315-5511
https://homutosho.com/
9:00〜17:30（土日祝休）

北区にあまたある建物のなかで、テレビに最もよく映るのは大阪高等裁判所であろう。ニュースで見飽きたほどであるし、正直ご縁を持ちたくもない。入りたいとも、入れるとも思っていなかった。

しかし、なかに書店があると知れば話は別である。大阪高裁は、入り口で金属探知機などのボディーチェックを受ける必要があるものの、入館目的を告げずとも誰でも入れるのである。1階の左手奥に『大阪高裁内ブックセンター』はある。いつもの北区内にこんなに渋い専門書店があるとは、灯台下暗し。店に入るとすぐに、純喫茶の本の特集が目に付いたが（後でうかがうと、女性店員の方々に任せている棚だそうだが、2〜3カ月で入れ替えるのでこの記事が読まれる頃は跡形もないはず）、他の棚には法律の専門書がぎっしり詰まっている。

今回、この店の岡村正純顧問にお話をうかがうことができた。顧問は次のページで紹介する三砂慶明編『本屋という仕事』（世界思想社、2022年）の第5章「書店の棚論」を執筆されており、本書を知ったことがこの店、そして顧問を知るきっかけとなったのである。

東京・霞ヶ関に次ぐ2号店として

大阪高裁内の書店はかつては『法成書房』が地下で運営していた。近所の検察庁や弁護士会館にも出店していたという。法成書房の撤退後、2014年（平成26年）の入札の際に手を挙げたのが、（有）法務図書センターであった。同社は、東京にある法律書専門の取次（出版業界では卸のことを取次と呼ぶ）の、小売りを中心に手掛ける子会社である。事実、霞ヶ関の弁護士会館でブックセンターを運営しており、大阪が2号店に当たる。

さて、膨大な専門書は、どうやって仕入れられ、棚に並ぶのか。一般的な書店には、新刊書が毎日のように、適当な冊数ずつ、取次から自動的に届き、それが取りあえず棚に並べられる（売れなかったら返品できる）。これを出版業界ではパターン配本という。このように、小売店が主体的に仕入れや発注をおこなわないのは一見不思議だが、膨大な種類の本と雑誌が毎日世に出ることを考えると、取次が小売店に代わって選書することで効率的な出版流通が実現していると言える。

一方、岡村顧問のお話をうかがうと、この店の専門書は、新刊書であれ既刊書の補充であれ、日々の仕入れ・発注が腕の見せどころという印象が強い。手間が掛かるとはいえ、小売店の面目躍如である。新刊書は、出版社からの案内を見て仕入れる冊数を決め、出版社に発注を掛ける。補充は、この店のウェブ（ネット通販部門）担当者が作成する書誌データベース（霞ヶ関の1号店や取次も活用しているという）を使い、日々の販売データを基に発注する。このようにして発注した専門書は、そのほとんどが、親会社である取次を通じて翌日には届く。

近所の肥後橋南詰（西区）に、この店と似た専門書店として、行政書を主に扱う大阪府官報販売所がある。その運営会社である（株）かんぽうの取次部門から専門書を仕入れることもあるという。

じつは日本史の棚づくり名人の岡村顧問

さて、岡村顧問とはどのような方であろうか。ネクタイもタイピンも本や棚の柄で揃えてわれわれを出迎えてくださっただけでも、ただ者ではない。

顧問は神戸のご出身で、大学卒業後の1981年（昭和56年）にジュンク堂書店（現・丸善ジュンク堂書店）に入社された。当時のジュンク堂は、お膝元の神戸ではすでに有名な大型書店であり、顧問は新入社員時代から法経書（法律・経済・ビジネスといった社会科学系）の棚を担当されたという。ジュンク堂は、1995年（平成7年）の阪神・淡路大震災で神戸市内の店舗が被災したことをきっかけに、全国展開を進めていった。顧問も、大分店の店長や東京・池袋本店の副店長を歴任された。

2017年（平成29年）に現職に就かれた直後に『人文書担当者のための日本史概説（中世史中心）』（歴史書懇話会、2018年）を出版されている。本書は、ちまたにあふれる日本史の概説書とは一線を画していて、非売品で世に出まわっていないのがもったいない。運良く一読したところ、大学で専攻された日本史（特に中世）の知見を書店の棚づくりに生かすノウハウを、余すところなく披露されていることが分かる。特に、歴史家それぞれの思考の癖（いわば学説史、史学史）に折に触れて言及しているところが特徴で、大型書店で歴史家ごとに棚を設ける際の参考になるに違いない。

教育の本と福祉の本が仲良く（!?）並ぶ棚

顧問に店内をご案内いただくと、日常生活からは縁遠いはずの法律書の棚が、ぐっと身近に感じるようになるから不思議なものだ。

まず、どの棚も、上のほうに体系書、下のほうに実務書を並べてある。実務書となると『○○ハンドブック』『△△マニュアル』といったタイトルも増えるが、ビジネス書ほどはカタカナが氾濫しない。顧客の9割を占めるという弁護士の先生方のニーズにしっかり対応した棚づくりである。いくつか例を挙げてみよう。

❶憲法の体系書の品揃えは少ない。体系書での勉強は、弁護士の先生方はすでにひと通り済ませてある（だからこそ司法試験を突破できたわけだ）から、この店に来てあらためて手に取ったり買ったりすることはほとんどなかろう。加えて、憲法は改正の前例もなく、判例も多くない。とはいえ例えば、新たに事務所を開業する弁護士がオフィスに最初に備え付ける本には、憲法の体系書が必ず含まれる。

❷「交通事故・医療事故」の棚があり、むち打ちに関する医学書も並んでいる。一方で、整形外科以外の診療科に関する本はほとんどない。治療薬の見方や処方箋の読み方といった医薬品の専門書も多く、医療過誤の訴訟で参照されるのだろう。

こうした棚づくりはやはり、現在の民事訴訟が抱える争点を如実に反映している。

❸専門書店とはいえ、タテ割りは排してある。例えば、犯罪（ギャンブル関係）と精神保健福祉法がすぐ横に並んでいて、よく見るとギョッとする。教育の本と福祉の本が仲良く（!?）並んでいるのも同様の理由であり、法律の実務では関連が深いに違いない。

❹ハードカバーの専門書がほとんどのなか、よく見ると文庫・新書が何冊か挟まっている。野崎昭弘『詭弁論理学』（中公新書、2017年改版）はロングセラーという。その隣に並んだ谷岡一郎『悪魔の証明』（ちくま新書、2021年）も、弁護士の先生に「うむ、法廷で喋るときに役に立つかも…」と思わせるだけの、魅力的なタイトルである。顧問は「弁護士の先生が『アレ?』と思うような本、専門家の教養に資する本を探してくるのが楽しい」とおっしゃる。なるほど、棚づくりの妙味に違いない。

弁護士さんの頭のなかをのぞく

お世辞にも広いとはいえず、窓もない店内には、BGMも流れていない（高裁の規定で流せないのだという）。専門書店ならではの濃厚で真面目な空気が漂うが、この記事をここまで読んでいただいてから棚を眺めると、弁護士の先生方の頭のなかをのぞいているような気分になることを請け合いである。毎月の売上ベストテンが貼り出されているが、ラインアップは一般書店のそれとはあまりにも違う。それを見に行くだけでも、ボディーチェックをくぐり抜ける価値がある。

（近畿大学経営学部教授　髙橋愛典）

『本屋という仕事』という本

「本が売れない」と言われて久しい昨今、駅前の小さな書店はすっかり姿を消したように見えます。情報発信の軸足をインターネットやSNSに移す動きが顕著になり、従来型の画一的に書籍を書店に配本する特殊な流通構造が、現在の書店経営の構造的な問題ともなっています。

では、書店という業種は、世のなかから必要とされなくなっているのかというと、そうでもありません。旧来型の書店経営が厳しさを増す一方で、この10年20年、厳しいながらも春に芽吹く野草のような、独立系あるいは「1人書店」と呼ばれる、小規模ながらもユニークな試みをはじめた書店がいくつも出現しています。こうした書店は、書店員たちが独自の品揃えをし、カフェを備え、地域向けのイベントに力を入れるなど、インターネットでは味わえないような人と人とのナマのつながりを大切にしています。その特徴は、本をツールとした場づくりと言い換えることができるかもしれません。

つひまぶ編集部で、「本のある空間」の特集を漠然と考えていたとき、編集部員の1人が、この『本屋という仕事』を皆に紹介しました。梅田蔦屋書店の人文コンシェルジュである三砂慶明さんが「ぜひ話を聞いてみたい」と思う、書店員や書店店主18人が、それぞれで書かれたり紹介されている本です。

帯には「本屋は焚き火である」との惹句があります。焚き火とは、人が集まり心も身体も温かくなる〝場〟のことです。思いの込められた本がくべられ続けるかぎり、本屋という〝場〟は続くのだという、祈りにも似た思いが、この惹句には込められています。

登場するのは、大手チェーンからまちの個人商店まで、1人書店の嚆矢となった店主から棚づくりの名人まで、全国から注目されている人たちばかりです。つひまぶのこのページで紹介することになった『大阪高裁内ブックセンター』の岡村正純さんも登場します。専門書店ならではの棚づくりの妙やご苦労をはじめ、思いだけではない、利用者の視点に立った棚づくりのことなどが、本書では紹介されています。

本書を読んだつひまぶ編集部では、「大阪高等裁判所のなかに本屋さんがあるの?」という驚きを出発点にして、岡村さんに会いに行き、本書からこぼれたお話などを聞いています。

本書とつひまぶを併せて読むと、私たちが生きる社会に新しい価値を加えようとしている人たちがいることが、分かります。本屋とはそういう仕事なのだと、か細いながらも遠くにまで届く声で、本書は語っています。（ルイス）

『本屋という仕事』
三砂慶明 編（世界思想社 2022）

商店街と名店街で光ってる　地元に根差した本屋さん

キラッと光ってる まちの本屋さんにあって大型書店にないもの

地域文化のリーダーとして、本に親しむきっかけをつくる 天六『TOHWA BOOKS』

「書店は地域文化のリーダーたれ」。天六交差点から天神橋筋商店街を南へ約100メートル進んだところにある赤レンガ風の2階建ての書店、1977年（昭和52年）創業の『TOHWA BOOKS』の社訓だ。創業者の戸和（とわ）繁晴さんは本好きが高じて27歳の若さで天六に書店を創業し、のちの1988年（昭和63年）には都島区に毛馬店を開業する。当時は天六書房や福本書店、大栄書店や三京書店など、たくさんの書店があったそうだが、電子書籍やネット書店の出現、読書文化の衰退により、書店を取り巻く環境が大きく変わり、今や商店街に古くから残る書店は2店舗のみとなった。

店長の小松原雅彰さんは、「まちの本屋は、敷居が低くて、気軽に立ち寄れて、遠慮なくなんでも聞けるのがいいところ。書店員とコミュニケーションを取れることが魅力やと思います。レイアウトはかぎられるけど、並べる本次第で店舗に奥行きや深さを演出できます。ただ単に本を売る場所ではなくて、行くのが楽しみになる場所づくり、いかに実店舗に足を運んでいただけるのかを考えて、品揃え、サービス、きっかけづくりを意識したいですね。そのために、まずはつぶさない（笑）」。

本を買いたいという購買欲はネット書店で満たされるが、まちの書店には、本と人との出合いの場を演出し、文化を継承する役割がある。

「近くに書店がないと本になじむという習慣がなくなり、読書と活字文化が衰退していきます。それはまちの衰退につながる」。戸和さんはそう話し、本に親しむきっかけづくりが重要だとして、大阪読書推進会の『こどもの本の帯創作コンクール』と『私の読んだ本・読書ノート』運動に18年間取り組まれている。

「帯創作は選書した本を何度も読み、内容をどうやって帯に反映するかを考える熟読、読書ノートはたくさんの本を読んで要約し、読書意欲を高める多読。熟読と多読で紙の本に親しむきっかけづくりをしています」。

本になじむ習慣や活字文化を次世代、そしてまちへとつなごうとする試みは、社訓である「書店は地域文化のリーダーたれ」を体現しているかのようだ。戸和さんは「本好きの勝手な言い分だけど」と話を続ける。

「紙の本は、読みたくないときはどこかに置いておけばいい。なにかの拍子にざっと読めるときがあるから。でも、電子書籍は本を買った記憶ごと埋もれてしまうでしょ。埋もれて流れていくから、せっかく出合えた本なのに、最後まで読まないケースもあって、もったいない。だから、ええなぁと思った本はまちの本屋で見て、触って、買って、置いて、積んでおく。ひとまず積んで、興味のある本から読んでいく」。

書店員の語る紙の本の魅力は、説得力がある。某アニメの「紙の本を買いなよ電子書籍は味気ない」を彷彿とさせる戸和さんの言葉は、最後にこう締めくくられた。「まちの本屋で買いなよ」。

商圏（まち）の実情に合わせ、通ってもらえる店づくりを目指す 『西日本書店』

「創業1975年（昭和50年）としているんですが、じつはもう少し古いんです。最初は天神橋2丁目に小さな店を構えていて、その後、2丁目北の物件が空いたので移りました。そこが（株）西日本書店の設立となります。今となってはそのへんが曖昧で、創業1975年（昭和50年）で統一しています」。

そう話すのは、天神橋筋商店街にある1番古い新刊書店『西日本書店』代表取締役社長の石井久二子さんだ。

「創業者の主人は北九州出身で、本がすごく好きで本屋をはじめました。レジがチャンチャンと鳴っている活気のある本屋が好きだったようです。西日本書店と名付けたのも、いずれ西日本一帯に本屋を構えたかったとの思いがあったんでしょうね。だけど厳しかったですねぇ。弊店もあと3年で創業50年なので、あと3年は店舗に出られたらいいなぁと思います。つぶしたらあかんという思いと、ここで本屋を続けたいという思いが重なります」。

お店は、南森町の交差点から商店街を少し北へ上がったところにある。青の看板が目印だ。入口には大阪関連本コーナー、そして雑誌、新刊書籍、奥には広告・デザイン関係の本が置いてある。

「元々、南森町界隈は印刷やデザイン、広告会社が多く、クリエイターのまちでした。それに合わせてデザイン系の本を主軸に販売するのが、主人の思いだったようです」と久二子さん。

「そういうクリエイターたちの仕事をお手伝いする本屋、というコンセプトでしたね。その頃の西日本書店の封筒には『デザインワークアシスト書店』と書いていました。だから今もお店の青看板にはデザイン書と書いてあります」。そう話すのは店長の槌賀（つちが）啓二さんだ。

「その時分の地域の実情に本屋を合わせていくのが、ものすごく大事なことだと思います。本屋の棚を見れば商圏（まち）の特徴が見えてきます。10年ほど前からタワーマンションが増え、商店街ではベビーカーを押して歩く人が増えてきました。近くの小学校が校舎を増築するくらい児童が急増したことに合わせて、品揃えを変えなあかんな～と。昔はマンガも児童書も置いていませんでしたが、思い切って品揃えを変えました」。品揃えから商圏の特徴も分かる。まちの書店の棚はまるで、地域を映す鏡のようだ。商圏に合ったやり方の1つだろうか、最近では配達サービスも展開されている。

「需要が多く、今はバイク2台で配達しています。雑誌の定期購読などをサブスク的に考えていただけたら。無料で、北区、中央区、西区にも配達しています」。

なるほど、定期購読したい雑誌でも、店に足を運べずに買い逃すときもある。でも配達してもらえると定期購読が続く確率が高くなる。忙しいお客さんにはぴったりだし、配達がサブスク的とは興味深い捉え方だ。また、配達以外にも、ネット販売やSNSでの発信など、新たな試みにも積極的に取り組み、まちのニーズに応えて漸次変化し続ける。

「通ってもらえる店づくりを。明るく元気で居心地のいい空間を目指したいですね」。そう話す槌賀店長には、この仕事をはじめた頃にマスコミの偉い人に言われて、胸に刻んだ言葉があるそうだ。

『本屋を見ればまちの文化度が分かる。本屋はそのまちの住民の文化的好奇心を満たし、文化の尺度を推し量る、とても大事な仕事なんだよ』と言われ、背筋が伸びました。今でもこの言葉を胸に刻んで、お店に立っています」。書店員の職業倫理を垣間見た気がした。

エッジの効いたフェアにPOP 書店員の思いが本に宿る 『清風堂書店』

人の波が絶えない大阪メトロ谷町線・東梅田駅と直結する梅田セントラビル地下2階の名店街の一角に、リベラル色が濃く、時の政権を揶揄するエッジの効いたフェアや、炎上間違いなしの尖ったPOPでたびたび世間をにぎわす、『清風堂書店』がある。自費出版サロンや関西唯一の教育書専門店を設け、出版部では教育書や学習参考書などの出版も手掛けている。毎年春には教育書のカタログ『教育書ブックナビ』を発行し、大阪市などの小中学校職員室に無料配布していて、今年度で48年目を迎えたそうだ。代表取締役社長兼店長の面屋（おもや）洋さんにお話をうかがった。

「清風堂書店は1967年（昭和42年）創業で前社長は父の面屋龍延（現会長）ですが、創業者ではないんですよ。父は若いときに北新地にあった共産党コミュニティのための極東書店に就職、そこから数人で独立し、清風堂書店を創業しました。共同経営をしていた当時の代表が亡くなり、父が引き継いだんです」。

梅田のど真んなかで〝共産党コミュニティ〟と聞くと、ちょっとドキッとするが、清風堂書店はその後、出版や教育分野へと進出していく。

『前衛』や不破哲三の本を置いていますが、今はそれほどでも。父は出版をはじめますが、教職員組合が強かった時代なので、学校の先生のための本屋に舵を切りました。教育書や児童書を充実させていき、先生のための学校もはじめたんです。ベテランの先生が若手に授業のやり方を教えたり、テキストをつくったり、ジャン＝ジャック・ルソーの教育思想をみんなで勉強して本を出版したりして、その過程で出版部門が生まれたという経緯があるんです」。

お店の変遷と経緯が見えてくると、店内からリベラルな空気を感じるのも納得だ。

「めちゃくちゃ左翼です（笑）ルーツが共産党系というのもありますし、私自身もゲイリブや、フェミニズムの運動を見てきました。SEALDs（※学生により結成された政治団体）が出てきたとき、社会運動や政治に興味を持った若い人たちに清風堂書店に来てもらいたいなと思い、積極的にリベラル寄りの本を置くようになりました」。

SEALDsといえば、過去にずいぶん尖ったフェアをされて、話題にもなった。

「SEALDsの選書フェアもやりましたね。本を紹介しただけでSNSのフォロワー数が300に激増したんですよ。ある大型書店が開催した『自由と民主主義』フェアで、騒動になってフェアから外した本を集めて、弊店で『某民主主義フェアから外された40冊』というフェアをやりました。良くも悪くも反応がすごかったです」。

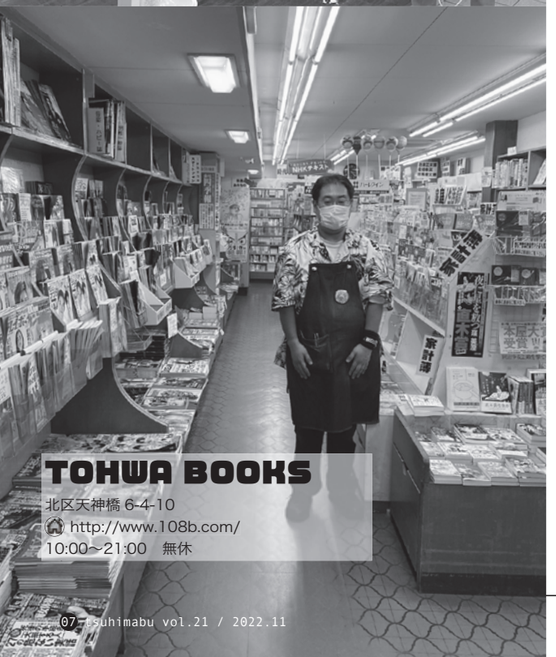
そんな清風堂書店なので、実際に炎上することも多い。「本屋も商いなので、炎上もアリなのかなと思ったりします。仕掛けるという意味では、本屋もメディアなんですね。注目される存在でありたいし、おもしろいイベントなども手掛けられる本屋になりたいです」。

「書店員が本を売りたいと思わないと、本は売れないんです。棚を触って大事にしている感じが出ると、本は勝手に売れていきます。思いは本に宿ります」。炎上も、書店員の思いゆえ、ということだ。

（西野仁）

西日本書店
北区天神橋２丁目北１–14
https://www.books-nishinihon.com/
月～金／ 9:30-20:00・土日祝／ 10:00～20:00

清風堂書店
北区曽根崎２-11-16 梅田セントラルビル B2
http://www.seifudo.co.jp/
月～土／ 10:00～22:00・日祝／ 10:00～20:00



TOHWA BOOKS
北区天神橋 6-4-10
http://www.108b.com/
10:00～21:00　無休

本本堂通信 西天満には『大阪書店商業組合』がある。経産省から認可を受けた書店団体としては唯一無二の団体で、各都道府県に一つずつある。府下の書店を中心に構成され、業界の発展のほか、良書を育て普及させるためのいろいろな社会活動などをおこなっている。

ビルの2階の「美しい島」に行ってみた

台湾ラブ×本好きのオーナーがつくった古書店には、知らない台湾がいっぱい

フォルモサ書院
北区天神橋 3-2-31 小西ビル 2F-D
https://formosa8.webnode.jp/
11:30 頃～ 18:00（日曜 11:30 ～ 17:30） 不定休

天神橋筋商店街では、昨年から今年にかけて、台湾カステラのお店、台湾菓子専門店、台湾朝食専門店と立て続けにオープンし、どれも行列ができる人気店で、ちょっとした台湾ブームに沸いています。そんな天神橋筋商店街の南森町駅近くに、台湾の書籍を扱う古書店があると聞き、訪ねました。

店名は『フォルモサ書院』。そんなに広くない間口のビルを奥に進み、狭い階段を2階へ上がると、廊下の奥にイスが置かれ古本が入った箱が乗せられていました。すぐ横の扉を開けると、台湾関係の写真や雑貨が迎えてくれます。

じつは、古書店は初体験の私。ちょっと緊張しながら入店しました。いろんな道をたどり、縁あってここに集められた古本や雑貨たちが所狭しと並べられ、書店に来たというよりは、お宅に…しかも客間ではなく台所におじゃました気分。雑然とした、程よいカオス感がたまりません。

店主の永井一広さんは、元々は会社員でした。仕事のストレスを抱えていた永井さんに奥さんは「辞めたかったら、辞めれば？」とあっさり。退職後、かつて中国留学を志したこともある永井さんは、この機会にと、2カ月半の台湾留学を決意します。永井さんの奥さんは台湾人。奥さん1人を日本に残しての留学でした。

「台湾に長期滞在してみてあらためて思ったのですが、台湾って、人がすごくあったかいんです。生きやすいんですね」。

日本と台湾の間には正に負に多くの歴史が積み重なっています。日清戦争後から太平洋戦争終戦までの50年間、日本だった台湾。80歳以上の台湾の方は、今でも日本語を話せる方が多いそう。永井さんが奥さんの実家を訪れた際には、奥さんのおばあさんもうれしそうに日本語で話し掛けてくれたのだとか。そこにある歴史の事実もさることながら、人の心根の優しさや空気感など、台湾の魅力を伝えていきたいと、永井さんは語ります。

そんな永井さんは、じつは生来の本好き。台湾留学の少し前には、文の里商店街の古書店『みつばち古書部』で木箱1箱分の自分の棚を持ち、小さな古書店をオープンさせていました。そんな生来の本好きも相まって、帰国後、本格的に物件探しをはじめ、2018年（平成30年）10月に現在の場所で『フォルモサ書院』をオープンさせます。「フォルモサ」とは、ポルトガル語で「美しい島」。台湾の美称だそうです。

店内には、いわゆる普通の古本もありますが、中国、タイ、メキシコ、ウクライナ等、いろんな国の本が並びます。その一角を占める台湾コーナーには、台湾で出版された本、台湾在住の日本人が書いた本、日本人による台湾旅行記などが。台湾が日本だった頃の教科書など、思わず見入ってしまいます。

永井さんの1冊は？とたずねると、手に取ったのは『ハヤシ百貨店』。台南銀座のモダンな5階建てビルで、昭和の台湾のハイカラを象徴するような存在だそうです。そんなハヤシ百貨店の歴史などが写真多めで紹介されている中国語の本の日本語訳版。ちょっと不思議ですが、元々中国語で出版された本が日本語に翻訳され、それが台湾で売られているそうです。台湾を訪れる日本人観光客に向けてのものなのだとか。

店内の雑貨も異国情緒漂うかわいい♡ものが多く、プチ旅気分も味わえて、思わずテンションが上がります。そして気が付けば、台湾に行きたくなっている私なのでした。（秋山暁子）

本本堂通信 グランフロント北館の大阪ガス都市魅力研究室では1～2カ月に1回『博覧強記の夕べ』が開催されている。自己紹介代わりに本を持ち寄って紹介する、出会いの場として機能している。参加方法はフェイスブックで検索。本をツールに人が交流する。じつにサロン的！

堂島から朝来市に移転した「本おや」さんの今

コロナ禍が後押しした、好きなことを一生の仕事とするために

その昔、堂島にちょっと変わった店名の本屋さんがあったのだった。『本は人生のおやつです!!』。店名というよりも、店名のかたちを借りたメッセージですな。「本は人生を豊かにしてくれる。人にとっての主食は人であってほしいから、本は人生のおやつ」と語るのは、店主の坂上友紀さん。元は書店員だけど、当てもないまま書店を辞め、半年足らずでご自分のお店を出してしまった人。でもその11年後の昨年冬には、梅田のど真んなかから、アクセス超不便（！）な朝来へ引っ越してしまった人。おっとりしているようで、結構アグレッシブな人なのだ。

朝来移転の本当のところや朝来暮らしなど、堂島のその後が知りたくて、車で2時間かけて現地まで遊びに行ってきた。

新しいお店は古民家をおしゃれにリノベした店舗。その奥には住居である母屋。それとはべつに蔵が3棟ある。目の前には蛍も飛び交う清流。ロケーションは抜群だ。縁側を上がってお店に入る動線がおもしろい。中央の陳列什器に仕切り壁がないので、奥が見渡せて、広さを感じさせる。ビルの一室にあった堂島店は本のジャングルをほふく前進で動くかんじだったが、朝来店は開放感が気持ちいい。

「堂島時代よりも店舗スペースは約1・5倍になったかな。店に並べている本は6000冊くらい。本を少し減らして、雑貨を置いています。朝来にはかわいい雑貨屋さんが少ないので、ニーズがあると思って。あとは、どんな特色の本屋なのかを分かってもらいたくて、新刊を増やしました」

新しい店について語る坂上さんはとても楽しそうだ。でも、都会のど真んなかの堂島からこんなのどかな場所に移転して、経営は大丈夫なのだろうか？と、余計な心配もしてしまう。

「堂島時代と比べても売り上げは減っていないんですよ。むしろ、出ていくお金が減ったぶん、収支は良くなってます。車社会なので、朝来だけじゃなくて、豊岡や養父、鳥取からも人が来てくれます。大阪から月1ペースで来てくださる人もいます。それに、豊岡や朝来は移住者も多いので、なんとなく移住者ネットワークができていて、そんな方たちも遊びに来てくれるんです」。

朝来市は移住者対象の助成金等が手厚く、地域おこし協力隊も定着しているとか。

「その通りなんですが、それらはすべて後付けの理由です。そもそも、この物件が気に入って。母屋に住んで～、帳場はここで～と、見た瞬間にサクサクとイメージができたんです。それが決め手（笑）」。

「結局、コロナ禍で店は休業を余儀なくされ、まちには人も歩いてないし、こんなんでやっていけるのか不安でした。それが1番大きかったですね。好きなこと、本屋を一生の仕事にしたいと考えたとき、以前から考えていた職住一体やそれが可能な移住が、ガガガ～と一気に動き出したかんじ。不動産屋さんとの出会いや、助成金のこと、町内会の方々との出会いなど、動き出してからは上手い具合にトントンと進んだけど、わりと前から考えてはいたんです。それにね、意外とアクセス便利。銀行も役場もスーパーも歩いて行けるんですよ！（笑）」。

物事が動き出すときってそうかもしれないと思い、ふと本棚に目をやると、坂上さんが本屋をはじめるきっかけとなった、彼女が好き過ぎる本、水木しげるの『ほんまにオレはアホやろか』が目に飛び込んできた。そうか、この本に従って生きてこられた坂上さんの答えの1つが、ここ朝来の店なのだな。（ルイス）

本は人生のおやつです !!
兵庫県朝来市山東町矢名瀬町 689
https://honoya.tumblr.com/
10:00～18:00 水木金休

あの店の本棚にあるマンガ

定食屋で、ラーメン屋で、喫茶店で、散髪屋で…。昼ごはんをかき込みながら、パーマを掛けている時間をつぶすために、私たちは店の一角にある本棚からぞんざいにテキトーな1冊を選んで、マンガを読んできた。そういう店に置いてあるマンガはだいたい種類が決まっていて、ヤクザもの、キャバやホストなどの夜の世界のもの、グルメマンガ、世界を股に掛けるあの百発百中のスナイパーのシリーズもの、暴走族もの…。単行本からコンビニ仕様の分厚いコミックまで。

時間つぶしに手に取っただけなのに、ごはんを食べ終わっても営業仕事をサボって最後まで読みふけり、気が付けばアフターのコーヒーを注文したりしている。続きなんてない、読み切りなのに、次の巻が読みたくて、それが目的でついつい通ってしまうという本末転倒。

スマホがあればいくらでも時間がつぶせる今、なんならスマホでマンガが読めてしまう今、あの店の片隅にあったマンガが消えてなくなるのも、そう遠くないのかもしれない。消えてしまう前に、天然記念物として保護される前に、まだまだ現役な「あの店の本棚にあるマンガ」を集めてみました。

総数 1200 冊以上、マン喫ならぬマン骨の『本気！』な思い

大阪天満宮の表参道である天神橋 1 丁目商店街のアーケードを南に抜けると、ガラス越しに大きなマンガ棚が見える『元気のでる整骨院』がある。「インバウンドのときには海外の旅行者が本屋と間違えて入ってきたこともある」とか。店内に足を踏み入れるとアニソンと戦隊ヒーローの BGM が流れ、待合室にはウォーターサーバー、そして約 1200 冊ものマンガが収納された棚がずらりと並ぶ。そのラインナップは本格極道ロマンの昭和の名作『本気！』、人気マンガ『ONE PIECE』、シュールなギャグマンガ『ミギとダリ』、そしてマンガマニアな院長推しの『ワンオペ JOKER』まで整骨院の待合室とは思えないほど幅広い。元々は従業員の暇つぶしにマンガを持ち込んだことがきっかけで本棚を置くことになり、患者さんからの寄贈もあってマンガがどんどん増えていったそう。まだまだマンガ棚を増設予定だそうで整骨院がマンガ棚に侵食される日も近い!?

「マンガ喫茶に負けないくらいマニアックでおもろいマンガを選書しています」とマニアな院長の『本気！』が見えるマンガ棚。もはやマンガ喫茶ならぬマンガ整骨院、いや「マン骨院」と呼びたい（笑）　疲れがピークに達したとき心身ともにリフレッシュできる「マン骨」を骨の髄までぜひ味わってほしい。

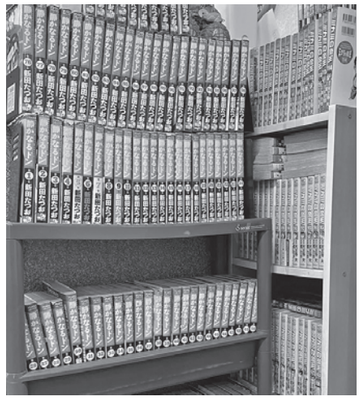
（西野仁）

●元気のでる整骨院
北区天神橋 1-13-9 ファミール栄
9:00 ～ 13:00 / 15:00 ～ 21:00 日祝休み
tel. 06-6881-5541

老舗理髪店を見守る『静かなるドン』と『難波金融伝・ミナミの帝王』

大阪天満宮のお膝元である天神橋 2 丁目商店街の最南端に、年季の入ったサインポールが目立つ理髪店『ヘアーサロン TARNA（ターナ）』がある。理容業を営むこと 45 年、地域の人に愛される名店だ。そんなターナのマンガ棚には『静かなるドン』と『難波金融伝・ミナミの帝王』が鎮座している。マンガのチョイスについてうかがうと、チャールズ・ブロンソンを彷彿とさせる激シブな店主は顎に手を当てこう言った。「読んだらおもしろかった。だからここに置いてある…」。う～んマンダム。100 点満ダムの回答じゃないか（笑）

店内に目をやるとヘアメニューがあり、顔剃や丸刈のメジャーメニューしかり、アイロンパーマ（濡れパン）、アイパー、ニグロパンチなどラインナップは秀逸だ。ニグロパンチはナリオカ式で、こだわる人には欠かせない技術らしい。『静かなるドン』『ミナミの帝王』を読みながらヤクザとカタギ人生の人間ドラマ、闇金業の非情と有情を嘆き、たまに見せるギャグセンスにニヤリと笑う。そんな普遍的な魅力が詰まったマンガを片手にニグロパンチを掛ける男は令和の現在にいるのだろうか？　昭和と平成を駆け抜けた２作品とターナは令和の時代にあって古くささを感じさせない魅力を持っている。今日も地域に愛されるターナをドンと帝王が優しく見守るのだった。（西野仁）



●ヘアーサロン TARNA（ターナ）
北区天神橋 2-1-18
ファーストタウニュー天神
9:00 ～ 19:00　月・第２火・第３火休み
tel. 06-6353-3650

まち中華で期待する『黄昏流星群』のような時ならぬ恋

天神橋５丁目商店街、寿司店激戦区にあって、かわいいコック姿の豚ちゃんが目印の看板が存在感たっぷりの、洋食ならぬ中華の『精養軒』。地元の常連さんでにぎわう、ザ・まち中華の名店だ。中華なのになぜか人気のオムライスあり、夏の冷やし中華も美味い。そんなお店の一角に、『エア・ギア』や『BAKUMAN』などの比較的新しめな平成マンガに混じって、平成生まれながら昭和チックな『黄昏流星群』や『人間交差点』が鎮座している。ラインナップに脈絡がないのは、「お客さんからいただいたマンガが多い」からだろう。

『黄昏流星群』といえば、中高年や老年の老いらくの恋だ。まちの気取りのないお店でのふとした出会いから時ならぬ恋がはじまり、味わい深い人生模様が展開していく…。このお店でもそんな素敵な出会いがあるだろうか？

そんなことを妄想していると、ラグビーボール型のオムライス（700 円）も流線形に見えてきて、思わず恋がどこかから降ってこないものかと期待に胸が高鳴ったが、常連さんたちの笑い声が耳に飛び込んできて、たちまち現実に引き戻される昼下がりなのであった。さあ、仕事に行かねば。

昼から夜まで切れ目なく営業しているので、昼飲みのお客さんもいる。ランチなど食べながらマンガ１冊読むくらいにはゆっくりできます。（ルイス）

●精養軒
北区天神橋 5-5-3
11:00 ～ 22:30　火休み
tel. 06-6351-6546

全長約 10 メートル、カウンターに並ぶお宝筆頭は『トイレット博士』

大阪駅前第３ビル地下１階に、映画『日本沈没』のポスターから坂本九のシングルレコード『上を向いて歩こう』まで、太陽の塔からボンカレーの広告ポスターまで、昭和グッズで彩られまくった『居酒屋 1969』がある。もちろん、店内には昭和歌謡が流れている。

コの字型のカウンター３辺を埋め尽くすようにずらーっと並べられたマンガは圧巻で、何百冊あるか分からんほどだが、カウンターの長さから推測して、約 10 メートルに及ぶかと。

昭和コンセプトだけあって、マンガもレア物が並ぶ。『１・２の三四郎』『侍ジャイアンツ』『愛と誠』『野球狂の詩』『ブッダ』『硬派銀次郎』『あばしり一家』『ど根性ガエル』『銀河鉄道 999』『サーキットの狼』『バビル２世』『三つ目がとおる』『嗚呼 !! 花の応援団』『恐怖新聞』… 56 歳のおっさんには懐かし過ぎるラインナップで、お店の方に聞くと「『トイレット博士』はたぶん、かなりレアですよ」。なるほどメルカリ等で調べてみると、なかなかの高値が付けられており、今や気軽に読めないマンガになっているようだ。同様のレア物がきっとほかにもありそう。

カウンターから顔を上げると、ちばてつや先生直筆の『明日のジョー』の色紙が飾られている。お客さんと先生の娘さんが同級生だという縁で、直筆の色紙が贈られたとのこと。これこそ超レアではないか？

マンガのことばかり書いているが、『居酒屋 1969』は、じつはこの界隈で４店舗を構える有名店。なんと経営する澤井一家は６男７女の大家族で、アットホームな雰囲気はまるで、『じゃりン子チエ』さながらのディープで明るい大阪だ。この日僕が食べただし巻き定食 590 円を筆頭にメニューは軒並み激安、かつ「チンポ de カルピススピリタス」など大阪らしいアホなネーミングのものも多い（笑）

マンガの取材で訪れたのに、マンガ以外の魅力があり過ぎて、書き切れない…。お客さんを巻き込んで、美人さん揃いのスタッフの総選挙とかやってるし。「１日の終わりを楽しく過ごしてほしい」と長女の麻衣さん。とことん楽しませるサービス精神があふれまくったお店なのだ。これから何回も行く！（ルイス）

●居酒屋 1969（１号店）
北区梅田 1-1-3 大阪駅前第３ビル B1-39
13:00 ～ 23:00　日祝休み
tel. 06-6343-6688

本本堂通信　大阪天満宮の東側徒歩5分ほどの場所にある『本のアトリエEIKO』は、豆本や和綴じ本などの、味わい深い手製本が並ぶお店。教室もあり、読み手でなく、本のつくり手としての歓びに浸れる。

本本堂通信　店主発行の『カツカレー図鑑』が評判の老松通りのスパイスカレー店『ザ・モチベーションショップ』には、お客さんから譲り受けたマンガが！　レトログッズも多数販売されており、店主もおもろい。カレーも美味い。退屈しないお店です。

フリーペーパーのフリーは「タダ」ではなく「自由」

フリーペーパー専門店を営むのは、ビジネス的価値観から抜け出す心のデトックス

再開発真っただなかのうめきた2期地区を抜け、梅田スカイビルから阪急中津方面に歩くこと約5分の場所に、うめきたの高層ビル群とは対照的な古びた民家があります。4坪の狭小な屋内にぎっしり並んでいるのは、全国から集められた多彩なフリーペーパーの数々。例えば、手のひらサイズの『カツカレー図鑑』、物忘れや更年期を特集した『ヘルス・グラフィックマガジン』など、ニッチなジャンルに特化した個性的な冊子が目に付きます。そんなフリーペーパーをつくる人／求める人のために、店主の田中冬一郎さんが2015年（平成27年）にオープンしたのが、フリーペーパー専門店「はっち」です。田中さんは、日中は銀行員として働いているため、店を開けるのは平日（水木金）の夜のみ。フリーペーパーは無料なので、「店」といえども基本的に利益は出ません。では、田中さんはどんな思いで店を続けているのでしょうか。

田中さんは以前からアーティスト支援を目的とする一般社団法人「ワオンプロジェクト」の代表理事を務められていますが、はっちをはじめると、すっかり「フリーペーパーの人」として認知されることに。「全然違う方向に進んだと思われがちですが、売れっ子ではなく駆け出しの人を応援しているという意味では、ベクトルは同じなんです。フリーペーパーを創刊したけれど設置場所に困っている人の手助けをしたいと思っています。だからクオリティーを問わずなんでも置くようにしています。定義やルールがないのがフリーペーパーなので、デザイン性が高いものより、個人が自由に手書きしてホチキスで留めたようなものの方がおもしろいですね。創刊号にありがちな、過剰な情熱やカオス感も好きです。行政や企業がお金を掛けてつくるフリーペーパーは、デザインは良くても、なんらかの思惑が見えてしまいます」。

普段は銀行員としてお金を動かす仕事をしている田中さんにとって、フリーペーパーのつくり手や店のお客さんは、ビジネス的な価値観にとらわれていない人が多いため、「心のデトックス」になるのだそう。「フリーペーパー専門店ってお金になるの？と聞かれることも多いですが、その問い自体がすでにブラックジョークですよね。ビジネスの中心からちょっと外れたこの場所で店を営むこともそうだけど、お金以外の価値観を持つって大切ですよね」。

そう語る田中さんですが、最近の新しい動きとして、はっちの間借り店を全国各地に展開しています。これは飲食店などの一角を間借りしてフリーペーパーを陳列し、そこに「はっち」の屋号を付けるというもの。手持ちの物件で間借り店を運営してくれる人にフリーペーパーというコンテンツを提供する、ちょっとしたフランチャイズのようなイメージです。「スペースはあってもコンテンツがないという店は多くて、逆にうちはコンテンツはあるけれどスペースや営業時間に制約がある。コロナ禍で実店舗をやる意味も考えさせられたし、本店はたとえトランクルームみたいになっても、間借り店があれば店は存続します。それに自分自身が間借り店のある各地の情報をフォローするようになって、フリーペーパーを通していろんな地域との接点を持てるようになりました。ローカルメディアとのつながりなど、これからも緩く情報発信のネットワークを広げていきたいですね」。

フリーペーパーの〝フリー〟は「タダ」ではなく「自由」と捉えるべきだとすれば、その自由さは、ビジネスから自由になり、場所にも縛られず、軽やかに各地へ進出していく「はっち」のスタイルと通底しているように思えます。（松岡慧祐）

はっち
北区中津 5-4-21
https://hatch2015.jimdofree.com/
19:00〜22:00（水木金のみ営業）

本本堂通信 西天満4丁目、イイダヤビル1階にある古書店『伏見屋書林』。大阪高裁に近いので法律書中心と思いきや、人文書がぎっしり。今回、取材の一環として（？）ある歴史家の著作集全5冊を購入。店主は専用のブラシを掛けて、丁寧に埃を落としてくださった。

キタのええもん
キタの手みやげ

ここでしか買えない 文丘堂オリジナル 繁昌亭コラボグッズ

今回訪問したのは、天神橋3丁目商店街にある文房具店『文丘堂』。赤と黄のカラフルな正面看板や、店頭に置かれたラックから商品がわんさと迫り出している様は、あのド派手なスーパーマーケットを想起させ、サービス精神を感じさせます！　文房具店は元々取扱点数が多い業種ですが、よく見ると、ままごとセットやエクササイズグッズ、写経セットもあれば店主奥様ハンドメイドのお手玉まで売られていて、一見、何屋さんか分からないほど。まるで縁日に迷い込んだようで、私の気分もアガります。商品の山をかき分け、いざ店内へ。ここに手みやげになりそうな商品があるのだとか。

所狭しと並ぶ商品のなかからご紹介いただいたのは、店主の築部（つくべ）健二さんの企画により生まれた繁昌亭とのコラボグッズ。落語の定番である「寿限無」を平仮名で全文表記したものや「ろくろ首」のニョロリと伸びた首をイラスト化したもの、座布団や提灯をモチーフにしたものなど、落語好きの私の心をくすぐる、落語をモチーフにした便箋4種です。特に目を引くのは「寿限無」の便箋で、俯瞰すると、寿限無の長文が「寿」の1文字になってます！　めでたさが倍増すること請け合いですね。「じつはこれが1番の自信作で、僕もお気に入り」と築部さん。

他にも「繁昌亭」と刻印された消しゴムやA4ノート、千社札シールもあり、味わいのあるシンプルなタッチと色合いで統一された商品はとぼけた魅力がたっぷりです！　ポストイットやストラップ、ボールペン等もあったようですが、現在は残念ながらソールドアウト。落語エピソードの1つも添えてウイットを効かせた大人の〝手みやげ〟として、お世話になった目上の方や女友達にさりげなく贈るのにぴったり。落語好きに喜ばれるのはもちろん、かわいげと実用性を兼ね備えたアイテムは、忙しいあの人の毎日をホッとさせてくれる効果もありそうです。

これら繁昌亭とのコラボグッズは、2006年（平成18年）の繁昌亭開業時から販売していたのですが、今は、繁昌亭では取り扱いがなく、手に入るのは、ここ文丘堂だけ。繁昌亭コラボグッズなのに、ここ文丘堂でしか手に入らないレアものなのです！　インターネット販売もないので、店頭まで足を運ぶしかありません。

文丘堂
北区天神橋 3-9-13
●平　日／10:30〜18:30
　土日祝／11:30〜18:00
●無休

全長約2・6kmにも及ぶ日本一長い天神橋筋商店街にあって、文房具店は今や文丘堂さん1軒のみ。さびしさもある一方で、店内に飾られた色紙には「ぶんぼうぐ屋さんは文化を商うお店です」のモットーが。菅原道真公をお祀りする天満宮のお膝元にある文房具店の矜持が垣間見えます。取材中にも地元の方が代わる代わる訪れ、ご近所の人々が交わる場、つまり文化が生まれる場にもなっているのがうかがえます。

そうそう、文丘堂には、500円買うごとにもらえる毎月ハズレなしのオリジナル宝くじがあるのです。こんなにも直球のサービス精神に脱帽です！（吉野早苗）

インディーズ系社会学者の 北区マップ 考現學

大阪市立住まい情報センターの天六界隈グルメマップ

ひと昔前までは、まちの飲食店をまとめた「グルメマップ」を目にすることは少なくありませんでしたが、昨今は食べログやインスタグラムが台頭し、また、グーグルマップにも飲食店の情報がほぼ網羅されるようになったことで、その需要は低下してきているように思われます。そんななかでも、10年以上にわたって発行され続けているグルメマップがあります。天神橋筋六丁目にある大阪市立住まい情報センター発行の「天六界隈グルメマップ」。市の公共施設があまり公的な匂いがしないグルメマップをつくるのは異例なのでは？その経緯について、センターの担当職員の方にお話をうかがいました。

「元々は地域連携の一環で、センターのボランティアスタッフの方々に手分けして店に調査に行ってもらって、その情報を基にマップをつくったのがはじまりでした。当センターは飲食禁止なので、イベントの合間の昼休憩などに天六界隈でランチをしてもらいたいという狙いもあります。ただ、飲食店情報は変化するので、その後は職員の手で2〜3年に1回は改訂しています」。

そこで気になるのが、グルメ激戦区の天六界隈において、どんな基準で掲載する店を選んでいるのか？ということ。最新版のマップに掲載されているのは、ジャンルを問わず、38店舗です。

「当初はボランティアスタッフが店を選んでいましたが、現在はセンターの職員たちも日頃から「ここ、おいしかったよ」と教えてくれる店の情報を参考に改訂しています。休憩時間にサクッと食べに行けるような店が望ましいので、行列ができるような店や、誰でも知っているようなチェーン店はあまり掲載しないようにしていますが、その一方で、独特な店や長く続く老舗を掲載するようにしています」。

このような一定の方針はあるそうですが、やはり選択肢の多い天六界隈でグルメマップをつくる上では、最終的にはつくり手の独断と偏見に基づかざるを得ません。取材に同行した編集長が「なんでこの店は載ってないんですか？」というツッコミを連発していたことからも、誰がつくるかによって店の選び方は大きく変わってきそうです。また、改訂のタイミングによっても店のセレクトは変わるのだとか。マップはあえてネットに載せることはせず、館内だけで配布しているのも、ターゲットを来館者のみに限定し、とにかくセンターに来てもらうことを1番の目的としているからこそのこだわりなのだそうです。

「不定休の店も多いので、詳細はネットで見てもらったらいいと思います」と職員の方が言われるように、このデジタル時代において、情報の量も鮮度も劣る紙媒体のマップには限界があることも事実。しかし、紙であることによる制限があるからこそ、マップには主観と主観が交わるおもしろさが生まれます。紙の上で情報が取捨選択された凹凸のあるマップには、つくり手の主観やこだわりがあり、それを読み手自身の主観と対峙させながら読み取っていく。それがマップをつくる／読むということです。データベース的なネットやグーグルマップとは違い、マップが創作物であるゆえんが、そこにあります。（松岡慧祐）

本本堂通信 天神橋3丁目商店街にある『矢野書房』は、一見、普通の古書店だが、店内にはジャニーズの公式写真、パンフ、雑誌バックナンバー、ポスター、カレンダーなど、ジャニーズグループのグッズが並ぶ『ジャニランドブース』がある。公式写真2万枚は圧巻！

彼女とキタのラブストーリー
――第二十回――

キッズスマイルブック 代表
南埜育子（なんのいくこ）さん

まちライブラリーや図書館などで盛んにおこなわれている絵本の読み聞かせ。ここ北区では、ちょっと変わった絵本の読み聞かせ『キッズスマイルブック』という活動があります。どんなふうに変わっているのか、また、どんな人が活動をおこなっているのか、代表を務められる南埜（なんの）育子さんにお話をうかがってきました。

また、もう1つ南埜さんが取り組んでいる『天満の子守歌』を歌い継ぐ活動についても、お聞きしました。

読書に夢中の少女時代

南埜さんは1949年（昭和24年）神戸市東灘区のお生まれ。幼い頃から本との距離が近かったようです。「幼少期、父からシンデレラの絵本をプレゼントしてもらいました」と目を輝かす南埜さんは、今も大のファンタジー好きで、お話を聞いていると、その頃の少女がそのまま大人になったよう。「いつか私の下にも、白馬の王子様がやって来てほしい」との願いは、大人になって現実のものとなりました。ファンタジー好きの少女の下に、白馬の王子様が本当に現れたのだとか。「主人が私にとって白馬の王子様なんです」と、いたずらっぽく笑います。

「子どもの頃からなのですが、物語を読みはじめた途端、一気に最後まで読まないと気が済まない性分。読みながらキャラクターになり切るんです！」。

物語の登場人物となって思い切り動きまわっている楽しげな南埜さんを想像して、クスッと笑ってしまいそうになります。

気付けばファンタジー作品だけでなく『秘密の花園』『マリーアントワネット』『少年少女文学全集』『あすなろ物語』『次郎物語』『城の崎にて』『夜明け前』など、かなり幅広いジャンルの本を読破。なかでも『秘密の花園』は、特別な1冊になるほど大好きでした。

「学校が大好きな子どもで、とりわけお気に入りの場所は図書室。図書室にいるだけで安心感がありました」。

図書室通いだけでなく、先生のガリ版刷りのお手伝いもよくしていたそうです。本だけでなく、活字全般が好きだったよう。

また、新学期に国語の教科書が配布されるとすぐに目を通していたとも。「子どもや孫が学校で教科書をもらってくると、私が真っ先に読むのが恒例でした」。

中学生になると電車通学になりました。この頃から親からお小遣いをもらえるようになったので、下校途中に芦屋駅の前にある書店で本を買う楽しみを覚えました。当時は、ハードカバーに比べて安価だった文庫本をよく買っては、すぐに読了する日々。長い読書遍歴のなかで、『秘密の花園』を何度も読み返したそうです。

「今はここには何も生えていない。だけど春になったら噴水のように花が咲くよ」とあるのですが、主人公になり切った南埜さんは、噴水のように花が咲くよう、ベランダの花に水をやり続けたそうで、「その姿を見た子どもの友だちに不審がられたの」と笑います。

『キッズスマイルブックの活動』

そんな読書遍歴を持つ南埜さんが、現在取り組んでおられるのが、小中学生を中心とした読書のボランティアグループ『キッズスマイルブック』です。毎月、第2土曜日に北区子ども・子育てプラザで、第3土曜日に北図書館で幼児に絵本の読み聞かせ活動をしています。

読み聞かせと聞けば、大人が子どもへ読み聞かせをしている光景を思い浮かべる人が多いのではないでしょうか？　ところが『キッズスマイルブック』では、年長の子どもが年少の子どもに読み聞かせをするのが大きな特色です。

最初は豊崎本庄小学校で図書ボランティアとして読み聞かせ活動をしていました。高学年が低学年に読み聞かせをする機会をつくったところ、子どもたちから「もっと読み聞かせをしたい」と訴えがあり、定期的な開催を模索することに。初めは具体的な開催方法が分からず、手探り状態でした。

南埜さんは「なんとか子どもたちの要望に応えたい」と、まずは身近な友人、知人に声を掛け、子どもの参加者を集め、子どもたちによる読み聞かせをはじめました。

当初は、3名しかいなかった読み聞かせメンバーは、やがて5名に増えます。最初は発表する場がなかなか見付からず苦心していましたが、北区子ども・子育てプラザから「うちで読み聞かせをしませんか？」と声を掛けてもらうことに。さらに、中央図書館や北図書館でも、読み聞かせ活動ができるようになり、どんどん規模が広がっていきます。その後、保護者の1人の生田祐佳さんが仲間に加入。生田さんは『キッズスマイルブック』の副代表として南埜さんと二人三脚で活動を続けています。

気付けば読み聞かせのメンバーは、20人近くに増加。現在、第1期のメンバーは高校生になっています。「経験を積んだ子どもが、年少者に読み聞かせをしている様は、まるで自分の弟や妹と接しているように映ります」。

一時的に人数が減り、存続の危機もあったそうですが、ピンチの際は子どもたちが、読み聞かせのメンバーを増やすべく、率先して声掛けをおこないました。子どもたちは時に大人の想像をはるかに超える力を発揮します。

当初は「子どもが子どもに読み聞かせをするなんて、本当にできるの？」という疑問の声もありましたが、「子どもの持つ力には驚かされます」と、みなさん、目を見開かれるのだとか。

『キッズスマイルブック』の主要メンバーは小学生。中学生に上がると、クラブ活動がはじまるため定期的に読み聞かせに参加することが困難になります。そんな多忙ななかでも「読み聞かせに参加したい」と切望する子どもがいるそうで、負担にならないよう「年に1回でもいいから、顔を見せてね」と伝えているそうです。

絵本といえば絵がメインだと思う方がいるかもしれません。南埜さんは絵本に書かれている言葉の素晴らしさについて話してくれました。「絵本の言葉は、まるで俳句のよう。端的で複数の意味が凝縮されています。子どもたちはみずみずしい感性で、絵本の言葉の意味をどんどんキャッチしていきます」と興奮気味に語ります。読み聞かせへ参加する子どもに「上手く読もうとしなくてもいいからね」と、南埜さんは優しく語り掛けます。「上手に読もうとするよりも、絵をよく見て、そこに書かれている言葉を感じ取ることこそが大事なんです。絵本って、総合芸術ですよね」。

南埜さんの絵本への思いが、そのまま『キッズスマイルブック』のやり方に生かされています。

コロナ禍で読み聞かせが中止に その間、久々の読書は3カ月で100冊

定期的に続けてきた『キッズスマイルブック』の活動ですが、新型コロナウイルス感染拡大の影響を受け2020年（令和2年）の4月から数カ月お休みする事態に。

「不意に空いた時間をどう過ごされていましたか？」という質問に南埜さんは「たくさんの本を読みふけっていました」と楽しそうに答えてくれました。普段からいろいろな活動に取り組まれている南埜さんは、かなり多忙。読書時間をたっぷりと取るのは、きっと難しかったでしょう。そう考えると読書に没頭できる時間は、読書の神様による南埜さんへの贈り物だったかも？

「2020年（令和2年）春の緊急事態宣言のときに、3カ月で100冊ほど読んだのではないでしょうか」。

これまで未読だった原田マハ、恩田陸などの作品に触れ「こんな作品があったんだ！」と、新たに感銘を受けたのだとか。「特にハマったのは、高田郁さんの『みをつくし料理帖』のシリーズです」と、楽しそうに当時の読書を振り返りました。

最初の数ページを読み出すと、すごい勢いでページをめくり読了するまで止まらないのが南埜さんの読書スタイル。家にある本をすべて読み尽くしてしまったのだけど、新たな本を買おうにも、緊急事態宣言が出ていたため、遠方までの外出ができず本の入手が困難に。「あそこならあるかも？とライフ本庄店へ行ってみたら、ライフのなかの本屋さんだけは営業してくれていて助かりました」。読書の神様は、南埜さんを見放しませんでした。

『天満の子守歌』を次世代に

さて、南埜さんは『キッズスマイルブック』に精力的に取り組む一方で、最近では、『天満の子守歌』を次世代に歌い継ぐ活動もされています。『天満の子守歌』は、江戸時代から戦前に歌い継がれていた子守歌。現在の天神橋1丁目から天満3丁目にかけての大川沿いにあった天満青物市場には、口減らしで奉公に出ていた子守役の娘がたくさんいました。娘たちは、主人や本家の子を寝かし付けるのに『天満の子守歌』を歌ったといわれています。

わらべ歌を勉強している際に、講師の先生から「格調高い『天満の子守歌』は大阪の宝です。大事にしてくださいね」と伝えられ、この歌の重要性を知りました。南埜さん自身は、義父から『天満の子守歌』を教わっています。「てっきり大阪の人の多くがこの子守歌になじんでいると思っていましたが、周囲にたずねてみると、ご存じの人はかなり少数でした。このままでは『天満の子守歌』が廃れてしまう…」と、大阪文化が途絶えることに危機感を抱きました。

そんな折、南埜さんが『天満の子守歌』を継承する活動をしているという話を耳にしたのが、前北区長の上野信子さんでした。上野さんが南埜さんに紹介したのが、天満出身でコーラス指導をしている伊藤宏美さんです。伊藤さんもまた『天満の子守歌』に強い関心を持っていました。

『天満の子守歌』の歌詞を書き起こしたいという伊藤さんに「ユーチューブにある子守歌の方が一般的には有名だと思うのですが、私の覚えている歌詞でいいんですか？」とたずねたところ、伊藤さんは「私は南埜さんの覚えている歌詞で書き起こしたいんです」と答えました。

『天満の子守歌』の歌詞は、日本ならばい協会（旧日本子守唄協会）が発表しているものと、北区で歌い継がれてきたものがあり、歌詞の一部が異なります。日本ならばい協会の子守歌の後半に「竹がほしけりゃ竹やへござれ竹はゆらゆら由良之助」とあります。この「由良之助」というのは、『忠臣蔵』に出てくる大石内蔵助のことです。よってこちらの歌詞ができたのは江戸後期以降。南埜さんがお義父さんから聞いて覚えていた歌詞は南天満公園の歌碑に書かれている「竹がほしけりゃ竹やへいきゃれ竹は天満のしのぶ竹」というもの。こちらの方が北区で歌い継がれた古い歌詞である可能性が高く、伊藤さんは南埜さんが覚えていた歌詞を採用しました。

現在南埜さんは伊藤さん、上野さんとともに『天満の子守歌』を次の世代へ歌い継ぐ活動を精力的におこなっています。

北区の人間としての自負

根っからの子ども好きである南埜さんは、取材中、子どもを主体にして話していたのが印象的でした。「ご縁やつながりをたどっていくと、すべて子どもに行き着くんです。北区には子どもを支える素晴らしい方がたくさんいらっしゃるので、そういう方々に憧れて活動を続けている面もあります」と語ります。

聞き手・書き手／高田豪　撮影／浅香保ルイス龍太

「今のような活動を続けてこなかったら、こんなに毎日動きまわっていなかったと思います。全部好きなことで埋め尽くされているので全然苦にはなりません」と、これまでの暮らしを振り返りました。

「私には北区の人間としての自負があります」と語る南埜さんは終始、北区で生活を営む人々への感謝と敬意にあふれています。

最後に「北区には『天満の子守歌』のような貴重な文化と、それを次世代へ継承したいという思いをお持ちの方がたくさんおられます。だからこそ私も、子どもたちにバトンを渡すお手伝いできればうれしいです」と快活な笑顔で締めてくれました。（終）